

日本地域看護学会委員会報告

2023年度日本地域看護学会研究セミナー 複線径路等至性アプローチ (TEA) とモデリング (TEM) の 理論と実際を学ぶ

2022 ～ 2023 年度研究活動推進委員会

日本地域看護学会誌, 27 (2) : 31-48, 2024

I. はじめに

研究活動推進委員会では、会員の研究方法に関する知識を高めるとともに、会員間の研究に関する交流を活発にすることによって会員の研究活動を促進し、地域看護学の発展に寄与することを目的に活動している。

「複線径路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach : TEA)」とは、文化心理学に依拠した質的研究の方法論である。近年、TEAが心理学やその近接領域で用いられ、日本地域看護学会誌にも研究論文が投稿されるようになった。この方法論は、地域の人々の生活を継続的・包括的にとらえて、人々やコミュニティと協働しながら効果的な看護を探究する本学会の趣旨とも合致する手法なのではないかと考え、本セミナーの開催を企画した。

本セミナーは、TEAの開発者のおひとりである安田氏に理論編を、保健師を対象とした研究のご経験のある小路氏には実践編をご講演いただいた。TEAは、聞きなれない用語も使われているため一見難解な印象を受ける。そこで理論に加えて地域看護学分野での事例と合わせて理解することで、具体的な方法やその有用性や意義への理解を深められるのではないかと考えた。

セミナーの司会は和泉京子委員 (武庫川女子大学教授) と平野美千代委員 (北海道大学大学院准教授) により進められた。

II. 研究セミナーの概要

1. 講 師

- 1) 複線径路等至性アプローチ (TEA) とモデリング (TEM) の理論と実際を学ぶ理論編
立命館大学総合心理学部 安田 裕子 氏
- 2) 複線径路等至性アプローチ (TEA) とモデリング (TEM) の理論と実際を学ぶ実践編
神戸女子大学看護学部 小路 浩子 氏

2. 日時と方法

- 1) オンライン配信 (講演と質疑・応答)
2024年3月9日 (土) 13:30～15:30
- 2) オンデマンド配信 (ライブ配信録画)
～ 2024年3月24日 (日)

III. 講 義

1. 複線径路等至性アプローチ (TEA) とモデリング (TEM) 理論編 (資料1)

講師：安田 裕子 氏 (立命館大学総合心理学部)

本報告は安田氏のご講演の内容を紙面に掲載するにあたり、初めてこの方法論に触れる本学会誌の読者が紙面でご理解いただけるよう、基礎的事項に焦点をあてて掲載している。より詳細な理論を学びたい場合は、参考文献に示された書籍を参照されたい。

1) TEAとTEM

TEMは2004年に誕生し、安田氏もその開発者のおひとりである。2022年3月に安田氏も発起人のおひとり

となり「TEAと質的探究学会」を設立され、現在は、同学会の理事長である。

TEAには3つの方法論が含まれている(スライド1-2)。TEAはもともと複線径路等至性モデリング(Trajectory Equifinality Modeling; TEM)から生まれた理論体系であり、TEMがわかれば分析も可能とのことで、本報告でもTEMを中心に説明する。

TEMは文化心理学に依拠した質的研究の方法である。中心的な概念は等至性(Equifinality)である。等至性とは、人々が異なる径路をたどりつつも同じような結果にたどりつくことを指す。この概念は、発達や文化的な事象に関する心理学的研究に組み込もうと考えたValsiner¹⁾の創案に基づいている。

TEMは横軸を時間、縦軸を幅としてとらえ、プロセスを二次元でとらえる(スライド1-3)。スライド1-3のうちJは等至点(Equifinality Point; EFP)(多様な経験の径路がいったん収束する地点)を示す。この等至点に至るプロセスにどのようなことがあったのかを、横軸で示す時間経過でとらえる。スライド1-3の縦軸I~Lが幅を示す。まず、研究上の目的からJの等至点(EFP)を定める。たとえば研究目的を「人はどのように大学院に行くのか」とした場合、等至点(EFP)は「大学院に行くことを決める」こととなる。しかし、大学院に行くことのほかに、就職・家を継ぐ・留学するなどの可能性もあったことがみえてくるのであり、その可能性の幅が縦軸となる。可能性は点線で示す。TEMでは、こうした多様性・複雑性、可能性・潜在性を、社会的・文化的な力の影響とともにとらえていく。

TEMの特徴は、①人間を開放システム(外界との相互作用により変化するもの)ととらえるシステム論Bertalanffy²⁾に依拠する点、②時間を捨象して外在的に扱うことをせず個人に経験された時間を重視する点である。①のように人間を開放システムととらえるため個人のみならずグループを単位とした研究も可能である。TEMの最小単位はスライド1-4に示すように、分岐点(Bifurcation Point; BFP)と等至点(EFP)、その間にある複数の径路によって構成される。この最小単位をつなげてプロセスが描かれる。

2) 基礎概念

別添に概念を整理した(表1, スライド1-5, 1-6)。

3) TEMの分析手順

TEMでは厳密な手続きを決めてしまうことでその手続きを踏むことにのみ注力した結果、とらえるべき現象

がいていねいにとらえられなくなるような弊害を防ぐ必要があると考えられている。ここでは、手順の骨子を示す。

(1) 等至点(EFP)の設定

研究目的から等至点(EFP)を定める。同時に両極化した等至点(P-EFP)を設定する。これにより縦軸ができる。等至点(EFP)ならびに両極化した等至点(P-EFP)は分析過程で必要に応じて修正する。はじめの等至点は「あり」「なし」で考え、分析しながら精緻にしていけばよい。

(2) 径路の可視化

径路を描く。データからは得られないが、ありうると考えられる径路が存在すれば、点線で描く。まずはライフラインのように気軽に描けばよい(スライド1-7)。もっとも、データを切片化し概念を用いてTEM図として精緻化することが目指される(スライド1-8)。

(3) 分岐点(BFP)と必須通過点(Obligatory Passage Point; OPP)の設定

等至点(EFP)に至る径路を考えながら、分岐点(BFP)と必須通過点(OPP)を特定する。

(4) 諸力の検討

変局点や結節化するポイントに、社会的方向づけ(Social Direction; SD)や社会的助勢(Social Guidance; SG)がかかっているかを考える。なお、(3)と(4)を合わせて検討する。

4) 分析してみよう「ワードマップTEA」(2015年3月より)

(1) 文字に起こし、繰り返し精読しよう(スライド1-10)

(2) 等至点(EFP)と両極化した等至点(P-EFP)を設定しよう(縦軸と横軸の決定)(スライド1-11)

(3) 意味のまとまりごとに区分しよう(スライド1-12)

切片化をして意味のまとまりごとにラベルを貼っていく。この際、力と径路を区別して考えるとよい。スライド1-12では力に下線を引いた。

(4) 行動や感情・認識をラベル化して位置づけよう(なにをとらえているのかを明確に、軸を意識して)(スライド1-13)

ラベルの縦軸を生かして配置する。行動のみ、認識のみでとらえることもできれば、両方合わせてとらえることもできる。いずれにせよなにの径路を描いているかを意識化することが重要である。

(5) 可能な径路をとらえよう(スライド1-14)

表1 TEMの概念

概念		説明
基礎概念	等至点 (Equifinality Point ; EFP) *スライド1-4参照	・等至性 (Equifinality) の具体的なありようであり、個人の行動や選択としてあらわれる／焦点化する。 ・まずは、研究者が研究目的に基づいて決定する。何らかの意味で人間のライフにとって重要性をもつポイントである。 ・分析のプロセスで変更することもある。
	分岐点 (Bifurcation Point ; BFP) *スライド1-5参照	・複数の経路が発生・分岐する点である。当人の生きる時間の流れのなかで発生するものである。 ・ここにかかる諸力をとらえることによって、経路を分岐させる諸力（後に説明）のせめぎ合いを分析することができる。 ・分岐点 (BFP) は、何らかの変容が生じている転換点と考えることができ、時期区分に生かすことができる。
その他の基礎概念	社会的方向づけ (Social Direction ; SD) *スライド1-6参照	・個人の行動や選択に制約的な影響を及ぼす、社会的な諸力を象徴的に表した概念である。 ・等至点 (EFP) に至るありようを阻害する力として、行動や選択の可能性や方向性が大きく制限を受けている場合、社会的方向づけの存在が想定される。→必須通過点 (OPP) ・社会通念で理解しないことが大切！ 例：中学生の喫煙について考えると、悪友の誘いは喫煙を助ける力=SGとなる。親が阻止するのは邪魔する力=SDとなる。社会通念で考えると親の阻止はよいことだが、この研究では等至点に照らしてSDとSGを考える。
	社会的助勢 (Social Guidance ; SG) *スライド1-6参照	・等至点 (EFP) へ向かうありようを促進したり助けたりする、社会的方向づけ (SD) とは逆に作用する力。 ・社会的助勢 (SG) や社会的方向づけ (SD) から、分岐点 (BFP) や必須通過点 (OPP) がとらえられる。
	必須通過点 (Obligatory Passage Point ; OPP)	・元来、地理的な概念で、ある地点に移動するために必ず通るポイントという意味である。 ・大きな自由度をもちうるはずの人間の選択や行動や経験が収束している状態が描かれ、制度や法律などによる制約的な力 (SD) を発見する手がかりにもなる。 ※逆もあり ・「制度的必須通過点」「慣習的必須通過点」「結果的必須通過点」がある。 ・分岐点同様、時期区分に生かすことができる。
	非可逆的時間 (Irreversible Time) *スライド1-4, 5, 6参照	・時間は決して後戻りしない持続的なものである。その持続しているありようを矢印で表現する。 ・個々人の経験の外部にあって時計で計測される客観的な時間ではなく、人のライフの持続とともにある時間である。
	複線経路 (Trajectories) と可能な経路	・人の発達や人生経路の複線性・多様性を表す。 ・収集されたインタビューデータ・観察データに直接には表れてはいないが、ありえる／ありえたと想定できる経路である。点線で描かれる。 ・描き出すことに意義があるものに限られる。
	両極化した等至点 (Polarized - EFP ; P-EFP) *スライド1-6参照	・等至点 (EFP) と価値的に背反であるような、補集合的なものとして、設定される。 例 「就職する」の反対は「就職しない」 ・等至点として焦点化した行動や選択の価値づけを相対化することに設定の意義がある。 ・そこに至る可能な経路が研究者自身にみえてくることがあり、また、読み手に多様な経路のありようを示すことができる。縦軸がみえやすくなる。

(6) 力 (社会的方向づけ・社会的助勢) をとらえよう
(7) 分岐点、必須通過点を同定しよう
5) データ (調査対象者) 数による特徴
1・4・9 (・16) の法則がある。1事例の場合は、個人の経験を詳細にとらえることができる。4±1事例の場合

合は、多様性と共通性をとらえることができる。9±2事例の場合は、経路の類型化が可能である。TEMではトランスビューを行うことが推奨されており、研究協力者1人につき3回お会いするとよい。

6) トランスビュー

TEMでは、非可逆的な時間に即して分析者が描出した径路図(TEM図)を、経験の当事者(語り手)にみてもらい対話することを推奨している。経験の当事者／語り手と分析者／聞き手とが、いま・ここで、TEM図を介して過去－現在－未来を行き来しながら視点(view)を融合(trans)させ、とらえられた径路の真正性を精査する行為である。二者間での語り－聞くという相互行為(inter-view；インター・ビュー)によりつむぎだされた経験を、語りに即し分析者の視点でとらえ描いたTEM図に、当事者の視点をさらに重ねあわせるかたちで、対話を進める。このことにより、分析者は分析の確かさを認識するとともに必要に応じて修正し、また当事者は、自らの経験への新たな気づきや意味づけを生じさせる。観察データのTEM分析に適用されてもよい。臨床実践では、カウンセラーの対象者理解の促進やクライアントの経験の語り直しに活用されている³⁾。

【文献】

引用文献

- 1) Valsiner J: Comparative study of human cultural development. Fundacion Infanciay Aprendizaje, Madrid, 2001.
- 2) ベルタランフィ L フォン：一般システム理論；その基礎・発展・応用。長野 敬・太田邦昌(訳)、みすず書房、東京、1973.
- 3) 安田裕子：トランスビュー。能智正博・香川秀太・川島大輔他(編)、質的心理学事典新曜社、173-174、東京、2018.

参考文献

- ・サトウタツヤ：TEMではじめる質的研究。誠信書房、東京、2009.
- ・サトウタツヤ・若林宏輔・木戸彩恵：社会と向き合う心理学－文化心理学を基礎として。新曜社、東京、2012.
- ・サトウタツヤ・安田裕子他：カタログTEA；図で響きあう。新曜社、東京、2023.
- ・安田裕子・サトウタツヤ：TEMでわかる人生の径路；質的研究の新展開。誠信書房、東京、2012.
- ・安田裕子・滑田明暢・福田茉莉他：ワードマップTEA理論編；複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ。新曜社、東京、2015.
- ・安田裕子・サトウタツヤ：TEMでひろがる社会実装；ライフの充実を支援する。誠信書房、東京、2017.
- ・安田裕子・サトウタツヤ：TEAによる対人援助プロセスと分岐の記述；保育、看護、臨床・障害分野の実践的研究。誠

信書房、東京、2022.

- ・安田裕子・滑田明暢・福田茉莉他：ワードマップTEA実践編；複線径路等至性アプローチを活用する。誠信書房、東京、2022.

2. 複線径路等至性アプローチ(TEA)とモデリング(TEM)実践編；地域看護研究の事例紹介(資料2)

講師：小路 浩子氏(神戸女子大学看護学部)

セミナーの後半は、小路氏(神戸女子大学看護学部准教授)より、TEMを使った研究「市町村保健師の職業的アイデンティティの形成プロセスと影響要因」¹⁾の研究プロセスを具体的に紹介いただきながら、データ収集と分析に焦点をあてて実践編を学んだ。

1) TEM(TEA)との出会い

保健師の職業的アイデンティティに関心があり、その形成過程について1人ひとり保健師に話を聞いて研究したいと考え、当初はライフストーリー法を用いようと考えた。しかしその過程にはさまざまな要因が影響すること、複数人のライフストーリーを分析統合することに悩んでいたとき、指導教員からTEMを紹介されてこの手法を用いることとした。

2) TEMの概念ツールと本研究での適用(スライド2-1)

TEMを用いるにあたり、プロセスをとらえるための概念ツール(表1)を自分の研究にどのように適用するかが大変重要となる。最も根幹をなす等至点(EFP)は、研究の目的から「職業的アイデンティティを形成している状態」と設定した。

3) データ収集方法

この研究ではインタビューは研究協力者1人あたり2回とした。本来は3回会うことが望ましいのだが、現役の保健師に3回も時間をとってもらうことが難しかったためである。

インタビューの豊かな語りを得るために、2つの方法をとった。①時代背景を想起しながら語ってもらうため、老人保健法施行からインタビュー時までの地域保健関連の法律制度の変遷を年表にした資料を提示した。②過去の出来事での心情を思い出してもらうためライフライン・インタビュー・メソッド²⁾を用いた。

2回目は、インタビューで得られた語りを時系列に整理し作成した活動年表(TEM図の原型となる)と協力者に描いてもらったライフラインを持参し、印象に残っている出来事とそのときの気持ちや周囲との関係などをよ

り深く聴き取った。ライフラインでは心情が揺れ動く様子が示されるが、山から谷へなど変化する局面に着目しその局面でなにがあったかをより詳しく聴き取った。

4) 分析のプロセス

安田氏の講義にもあったように、19人という事例数はかなり多い方で径路の類型化が可能な事例数である。本研究でも、アイデンティティ形成過程の特徴をとらえたいと考えたため、類型化を試みた。

(1) 19人それぞれのTEM図の作成

職業的アイデンティティに関連する語りをエピソードごとに切片化し、ラベルを付けてカードを作成し、時系列に並べ替え、TEMの概念ツールを使って経験の径路を可視化した。

(2) 19人のTEM図の比較検討

19人の多様性と類似性をとらえるため、①切片化・コード化したデータをカテゴリー分類し、②経験を分類してマトリックスを作成した。

(3) 類型化と分岐点 (BFP)、等至点 (EFP) の分析

保健師選択のスタート地点とアイデンティティ確立のゴール地点をみたところ、自分から選択した者はアイデンティティを確立していたが、他者から勧められて選択した者は、アイデンティティを確立していた者とアイデンティティの揺らぎを経験している者に分かれていた。その間の過程を詳細にみていこうとした。

個々のTEM図を詳しく紹介する。(スライド2-2)

図の中央は非可逆的時間経過に沿って出来事を並べている。ライフラインを参考に出来事の局面から分岐点を読み取り分岐点 (BFP) とした。図の上半分には出来事に関係する思いとその背景となる状況を配置し、図の下半分は社会的ガイドまたは助勢 (SG) と社会的方向付け (SD)、さらに協力者の個人的背景や出来事も配置した。この図はまだ分析途中であり、TEM図で過程を可視化したものとなる (分析過程における統合したTEM図)

19人のTEM図を分析過程で統合したものがスライド2-3 (分析過程における統合したTEM図) である。分析の統合過程でどれが分岐点 (BFP) か迷ったため、分岐点 (BFP) が多くなっている。分岐していない分岐点 (BFP) でいいのかと迷っていた。この段階では等至点 (EFP) (本研究では職業的アイデンティティが確立している状態) を「保健師の意識を強く保持する」、両極化した等至点 (P-EFP) (職業的アイデンティティが揺らいでいる状態) を「保健師の意識よりも行政職の意識が強い」と定めていたが、これでよいのかどうかという迷い

もあった。そこでこの段階で本研究法の専門家である安田氏にみていただき、助言を受けた。

安田氏からは「等至点 (EFP) は1つとは限らない、いろいろな物事がいったん収束する地点であり、19人の保健師の過程を見るとそのような地点はほかにもあるのではないか。アイデンティティ形成は成長過程だから、等至点 (EFP) を1つと限定せず、成長過程をとらえようと考えればよいのではないか」と助言を受け、等至点 (EFP) は1つでなければならないと思い込んでいた自分に気づいた。その後、指導教員からの指導も受けながら分析を進め、統合したTEM図 (スライド2-4) が完成した。

統合したTEM図では、分岐点 (BFP) は2つに集約され、等至点 (EFP) は3つ見出された。市町村の保健師のアイデンティティ確立の特徴として、市町村保健師は保健所保健師よりも事務職に囲まれて仕事をする特徴があるため、保健師なのか行政職なのかという葛藤が中堅期からみられる。そして最終の等至点 (EFP) は、保健師か行政職かというよりも「保健師と行政職の意識を融合させて専門性を発揮する」というアイデンティティ確立の状態に至っているという等至点 (EFP) を見出し、両極化した等至点 (P-EFP) は「行政職と保健師の意識の乖離と専門性への自信の揺らぎを認識する」とした。

(4) 径路の時期区分と命名および各地点の設定と根拠の明示

TEMでは「アイデンティティの形成段階」という研究テーマに沿って期分けを命名していく。命名をすることによって、径路が意味づけされていくことになる (スライド2-5)。

径路の各地点 (EFP, BFP, OPP, SD, SG) が分析の結果から研究テーマに対応して説明されることになる。質的研究では、この説明が恣意的なものではないかと指摘される懸念があるため、信頼性・信ぴょう性を確保するためにもなぜそのようにいえるのか、根拠を説明することが重要となる (スライド2-6)。

5) 現在の取り組み

(1) TLMG (Three Layers Model of Genesis; 発生の3層モデル) を用いた分岐点 (BFP) における保健師の意識変化の探究

TLMGは、分岐点を、中心の第3層である価値観の変容、第2層の記号の発生、第1層の行為でとらえ、第3層の価値観の変容や統合で信念の再構築がどのようになるのかをより深く分析するものである。TLMGを用い

て保健師の意識変化を深く探究したいと考えている。

(2) 一般教養科目でAuto-TEMの活用

女性の生き方やキャリア形成などを教授する一般教養科目で、自分の径路を描くというAuto-TEMを取り入れ、学生にこれまでの径路を振り返ってこれからの自分を描いてもらっている。TEM図を用いて学生同士、多様な考え方や価値観があることの気づきや自己の振り返り、自己洞察の深まりにつながっている。

6) 最後に

TEMを用いて研究してみたいと思ったら、次のことをお勧めする。

- ・まずTEM図を描いてみよう

自分の径路を描いてみてもよい。

- ・描いたTEM図を見てもらおう

TEAの研究会や勉強会があるので参加してみよう。さまざまなTEMやTEAを用いた研究に触れ、自分のスタイルをつくることができる。

- ・研究協力者にとっての副産物

研究協力者にTEM図が欲しいといわれることがある。研究協力者にTEM図を還元することで協力者自身の自己洞察に役立ててもらうこともできる。

【文献】

引用文献

- 1) 小路浩子：市町村保健師の職業的アイデンティティの形成プロセスと影響要因：複線径路等至性モデリング (TEM) による4類型からみた特徴。日本地域看護学会誌, 23 (2): 12-20, 2020. (2021年度奨励論文賞) https://doi.org/10.20746/jachn.23.2_12
- 2) 川島大輔：ライフレビュー。やまだようこ (編), 質的心理学の方法：語りをきく, 144-158, 新曜社, 東京, 2007.

TEM図を用いた小路氏のその他の研究

- ・小路浩子：中堅期の市町村保健師の職業的アイデンティティの形成プロセスと影響要因：複線径路等至性モデリング (Trajectory Equifinality Modeling; TEM) による分析。日本看護科学会誌, 41: 876-884, 2021. <https://doi.org/10.5630/jans.41.876>
- ・小路浩子・西原 翼：一人の保健師が地域包括支援センターの保健師として職業的アイデンティティを形成するまでのプロセス：複線径路等至性モデリング (TEM) による分析。神戸女子大学看護学部紀要, 7: 1-11, 2022.

IV. 質疑応答とまとめ

講演中にチャットに寄せられた質問に対し、おふたりの講師から補足説明をいただいた。

【安田氏への質問】

- ・「等至性」というのは、いろいろな人が複数の人生径路を経て同じような結果に至るというような概念でよいのか、1人を見た場合も、ありえた径路も描くから複線径路というのか？

安田氏：その理解でよい。研究では、研究目的を等至点 (EFP) に設定する。そしてそこに向かうありようは多様である。その多様性を複線径路としてとらえようとする方法である。1人の人を見る場合も、さまざまな人との関係性や状況のなかでその径路をたどることになる。可能性があったことも含めて複線径路ととらえる。

- ・1つのゴールを等至点 (EFP) と設定し、そこに至るプロセスを明らかにする研究方法と理解した。等至点 (EFP) を設定する際にいくつかの選択肢が考えられるが、それが具体的に明らかになっておらず、分析の経過でその具体を明らかにしながらそれぞれのゴールに至るプロセスを明らかにするような研究は、適さないのか？

安田氏：そのような研究テーマを排除するものではない。実際そのようなテーマで取り組んでいる人もいる。現象をとらえる工夫をすれば用いることができる。たとえば「留学をする」を等至点 (EFP) と設定した場合、研究協力者を集めてみたら結果的に留学せずに起業をした例が得られる場合もある。つまり等至点 (EFP) のバリエーションの1つの形ととらえ、径路を比較し特徴をみていけば意味のある研究になりえる。

- ・グランデッドセオリー・アプローチは、理論的飽和という考え方をするが、TEMで理論的飽和を考えようとする、複線径路の点線で示す「ありえる／ありえた」と想定できる径路」のデータを探してくる必要があるように思う。TEMでは、可能性を示しておけばよいという考え方なのか。

安田氏：TEMで理論的飽和を目指して、グランデッドセオリー・アプローチでいうところの理論的サンプリングをするのかどうかというご質問であれば、TEMでは理論的サンプリングという方法はとらない。

【小路氏への質問】

- ・研究のはじめにTEMの概念ツールをこの研究に適用して設定しているが、データ収集と分析の過程でこの設定が変更することはあるのか？

小路氏：TEMの概念ツールで最初に設定した定義の変更はない。しかし分析する途中でどこを分岐点とするかは変わっていった。等至点（EFP）は、研究目的に対応するので途中で変わることはないが、それが何であるかは分析がすすむと現象のとらえ方が変わり、変化した。この研究では、等至点（EFP）に設定した「保健師の職業的アイデンティティの確立した状態」が保健師としての意識か行政職としての意識かではなく、それらを融合させ専門性を発揮している状態と最終的に見出したことがそれである。

- ・2回目インタビューで当事者の視点を取り入れたことで深まった点があれば、紹介いただきたい。

小路氏：研究者と研究協力者が同じ保健師同士であっても、初対面なので1回目は緊張感があり、淡々と事実を話すという状況だった。しかし2回目は語りを時系列に整理した資料などがあり、この研究の趣旨や方法も理解してもらったあとなので、出来事よりもそのときの思いなどをより深く聴くことができた。

- ・インタビューが複数回であることやライフライン図を描いてもらうなどの方法に対し、協力者がどのような反応であったか教えていただきたい。

小路氏：ライフライン図は必ず描いてもらうとしていないので、描かない人もいる。ライフライン図を描いてくれた場合は思い出しながら描いてくれていた。このような手法をとることで、自分の径路を可視化し、自信や前向きな気持ちにつながったという反応もいただいた。本来なら3回目のインタビューができれば、分析結果を持参することができ、より深く共有できたかもしれない。

最後に大森純子委員長（東北大学大学院教授）により、次のように本セミナーの意義がまとめられた。

TEMは最初は複雑な研究法の印象をもってしたが、明快で細やかな説明でわかりやすく教えていただけた。具体例とポイントから理解を深めることができた。このセミナーの新たな学びが3点ある。

1つ目は、自身の質的研究への固定化した意識への気づきであった。質的研究に25年取り組んできて最近もややや考えることがあった。今回安田氏が「質的研究」

ではなく「質的探究」とされたことで、自分のスイッチを入れ替えられたような思いであった。「質的研究」という言葉で研究方法に縛られてしまっていたのではないかと気づいた。TEMは厳密な手続きではなく、手順の骨子である、厳密な手続きとしてしまうと手続きを踏むことに注力してしまう弊害をもたらすという説明に納得し、研究方法はもっと自由であってよく、探究しようとするのが重要なのだと改めて考えた。

2つ目は、質的探究の新たな視点を得られたことである。TEMは等至性の概念を取り入れ、多様で複雑な現象に正面から向き合う手法であると理解した。また説明のなかにモチベーションは内的要因ではなく、社会通念が内面化されたものととらえると社会的助勢（SG）や社会的方向づけ（SD）と位置づけられるという例があったが、この例からも自分のなかに固定化された社会通念が確立していると気づかされた。またインタビューを3回行うことを、ビューの融合、トランスビューという説明も新たな視点であった。理論的飽和についても、理論的飽和が重要であるという社会通念に縛られ過ぎているのではないか、それよりも人間社会の複雑性に真正面から取り組んでいきたいと思った。

3つ目は、おふたりの講義を聞きながら取り組みたい新たな研究テーマについて考えていた。ちょうど3.11東日本大震災の時期となり、東北人は気持ちがざわつく。東日本大震災から13年を経てようやく当時の自治体職員等語ることができなかった人も語り始めた。今回学んだ方法でこの方々の語りを探求してみたらわかることがあるかもしれないと考えた。

今回の参加者もいろいろな研究テーマを思い浮かべられたのではないかなと思う。このような機会を今後も大切にしたい。

V. 研究セミナーを終えて

参加者は、学会員146人、非会員8人、学生・院生14人であった。ライブ配信の参加者は64人、オンデマンド配信視聴回数は164回であった。53人（31.5%）から終了後アンケートの回答が得られ、内容について「かなりよかった」71.7%、「まあよかった」26.4%と満足度の高い回答であった。TEA/TEMの理解は、「かなり理解できた」26.4%、「まあ理解できた」69.8%であった。セミナーへの感想より、初めてTEA/TEMを知った人は「使ってみたい」「使えそう」「書籍を購入して学びたい」、

すでに書籍で学んでいる人からは「講演を聞いて理解できた」と、講師の先生方による講演が魅力的で理解しやすい内容であったことが表れていた。

今後のセミナーに希望するテーマなどについては、「今回のように研究方法の概論と実践をセットで企画してもらえると理解しやすい」「質的研究の多様な方法を希望する」などが挙げられた。

講師の先生方には、限られた時間であったにもかかわらず、わかりやすい講演内容をご準備いただき、参加者にとって大変有意義な時間となったことに深く感謝申し上げます。

2023年度研究活動推進委員会

委員長：大森 純子（聖路加国際大学大学院）

副委員長：平野美千代（札幌医科大学）

委員：和泉 京子（武庫川女子大学）

山下留理子（徳島大学大学院）

鈴木 良美（東京医科大学）

松永 篤志（東北大学大学院）

牛尾 裕子（山口大学）

資料1 複線径路等至性アプローチ (TEA) とモデリング (TEM) 理論編

文化心理学から生まれた現象や経験のプロセスをとらえる質的研究手法

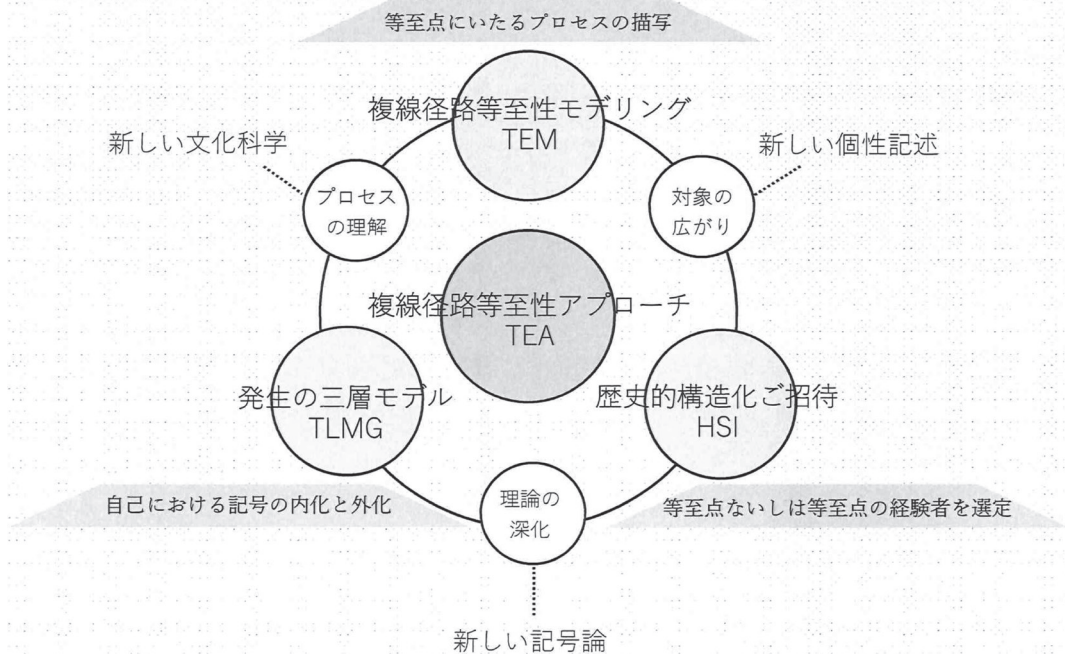
複線径路等至性アプローチ (TEA) の 理論と実際を学ぶ

安田 裕子
(立命館大学総合心理学部)



スライド 1-1

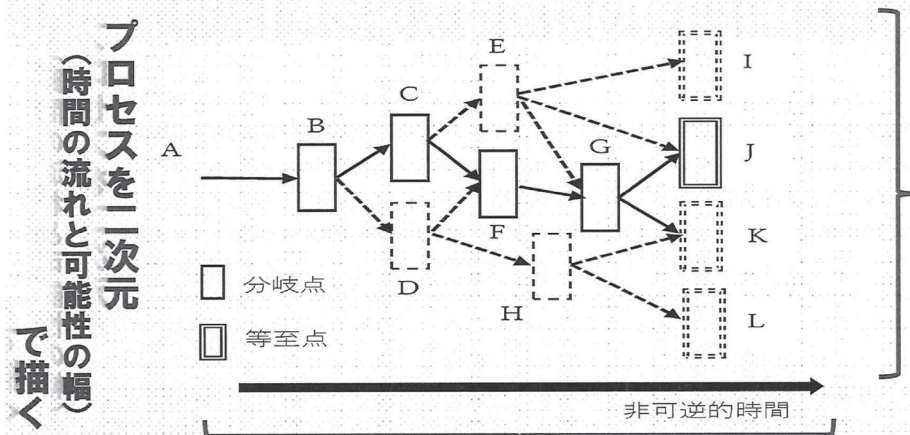
TEMから生まれた 三鼎理論としてのTEA



スライド 1-2

(資料1 つづき)

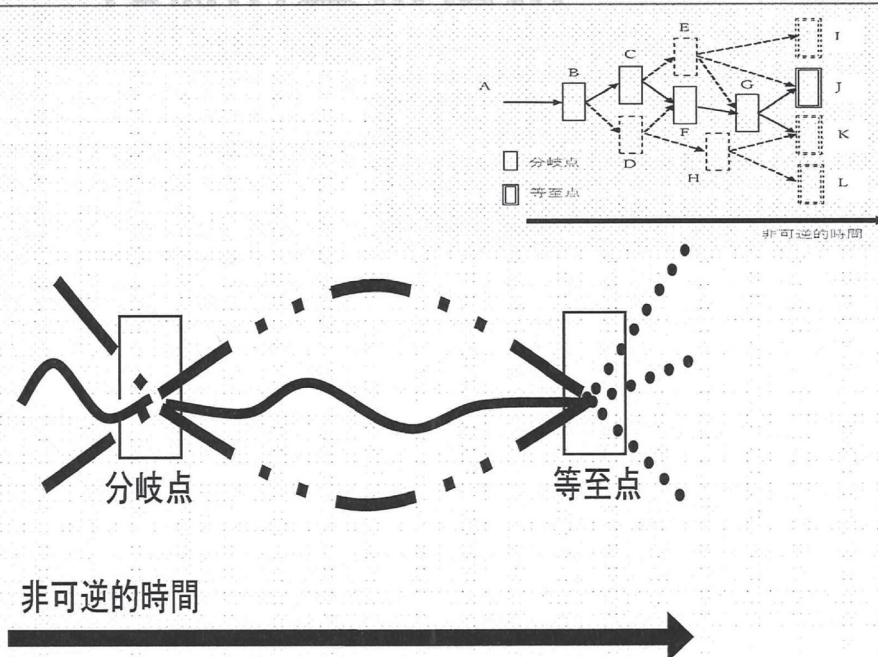
複線径路等至性モデリング (TRAJECTORY EQUIFINALITY MODELING : TEM)



- 等至性 (Equifinality) という概念を、発達や文化的な事象に関する心理学的研究に組み込もうと考えた Valsiner (2001) の創案に基づく、文化心理学に依拠した質的研究の方法である。
- 多様性・複線性、可能性・潜在性を、社会的・文化的諸力の影響とともにとらえる。

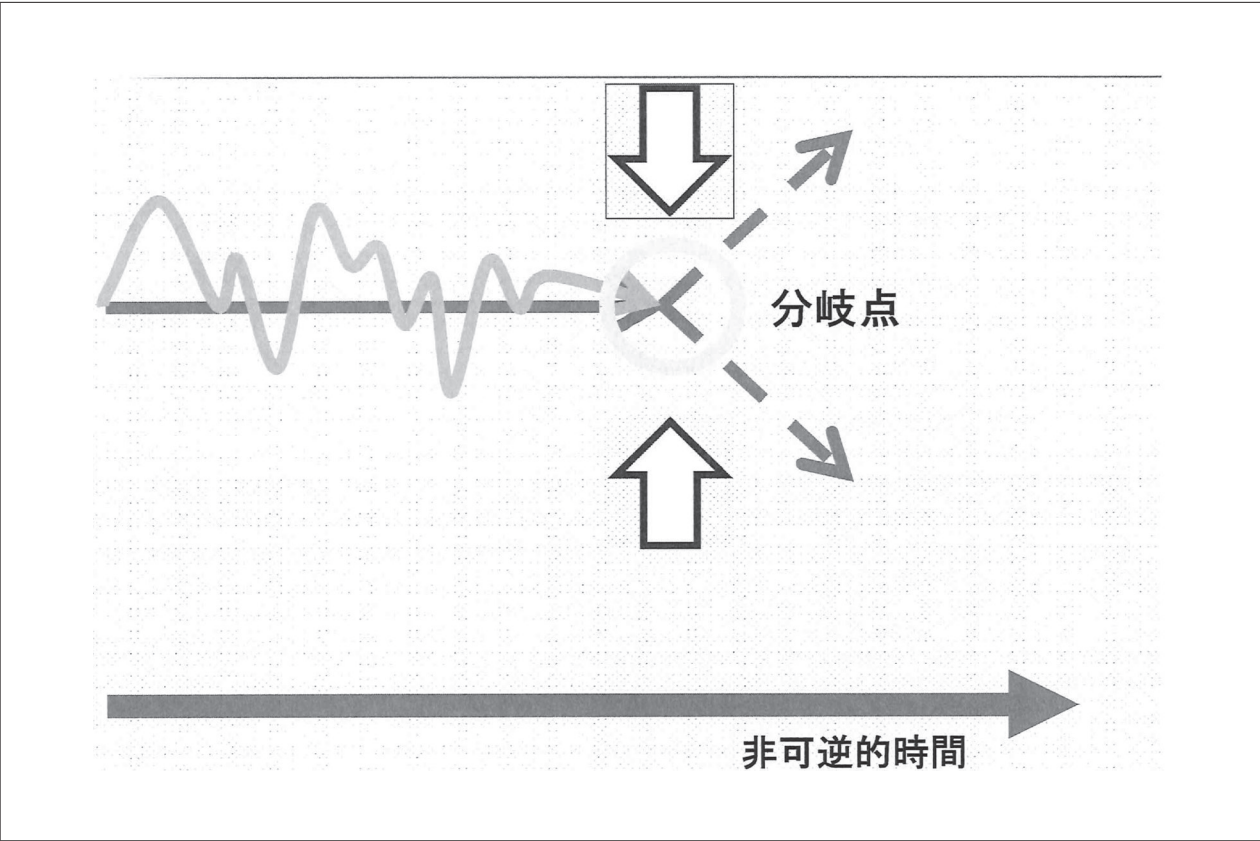
スライド 1-3

TEMの最小単位

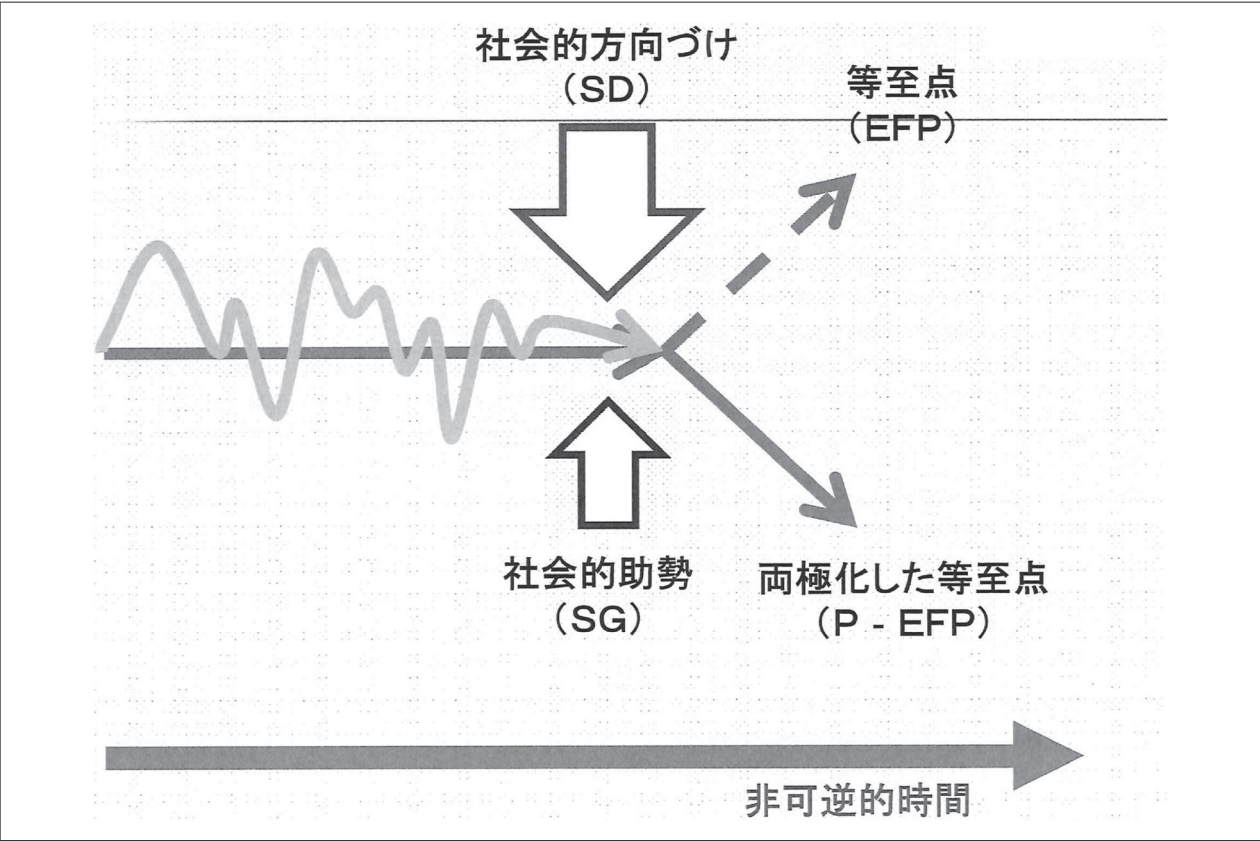


スライド 1-4

(資料1 つづき)



スライド 1-5

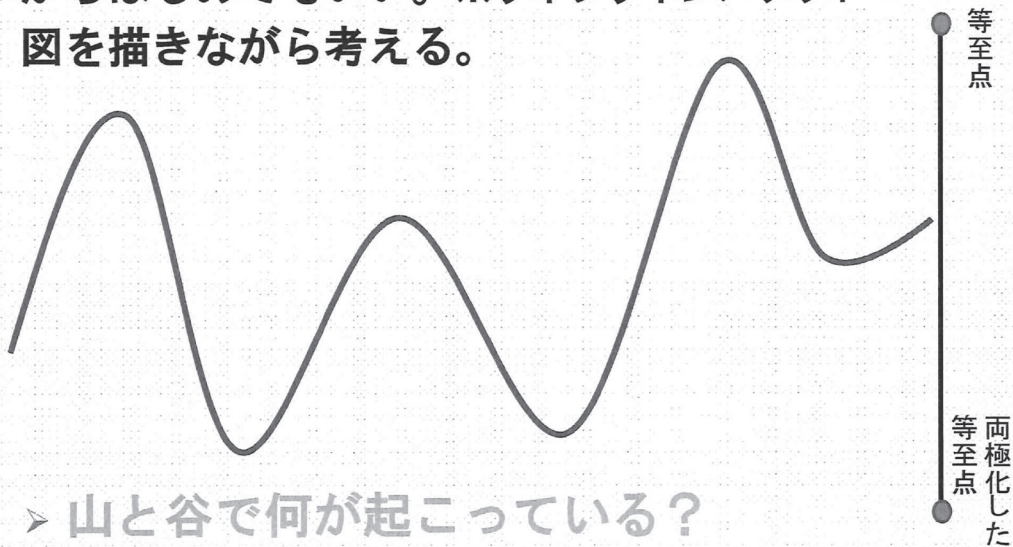


スライド 1-6

(資料1 つづき)

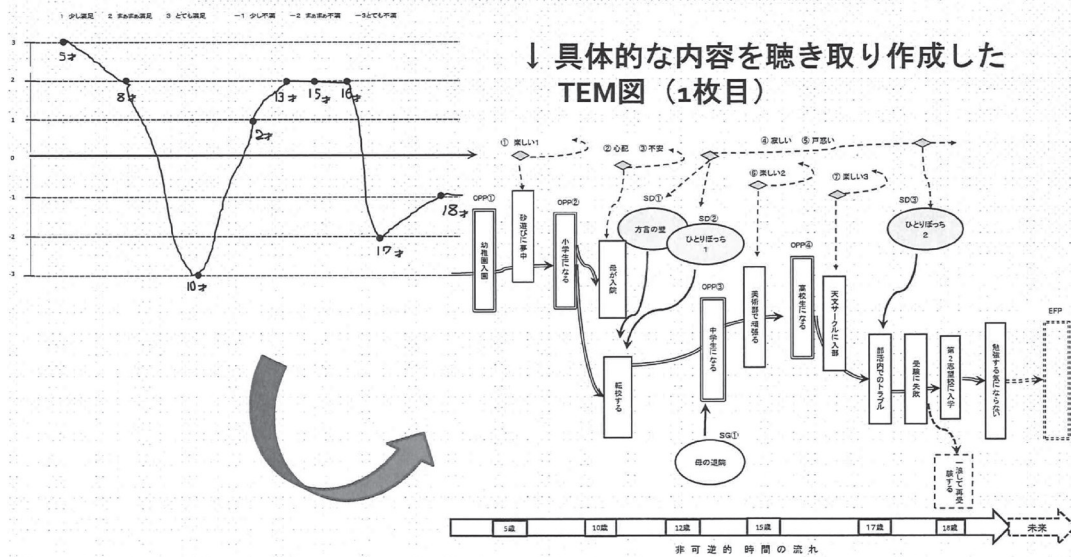
＜参考＞ 描きながら考える

- 縦軸を設定したうえでライフラインを描くところからはじめてもいい。※ライフラインメソッド
- 図を描きながら考える。



スライド 1-7

＜参考＞ ライフラインからTEM図へ



松本玲子. (2017). 大学学生相談のトランスビュー. 安田裕子・サトウタツヤ (編). (2017). TEMでひろがる社会実装—ライフの充実を支援する. 誠信書房.

スライド 1-8

(資料1 つづき)

分析してみよう

—『ワードマップTEA』（2015年3月）より—

スライド 1-9

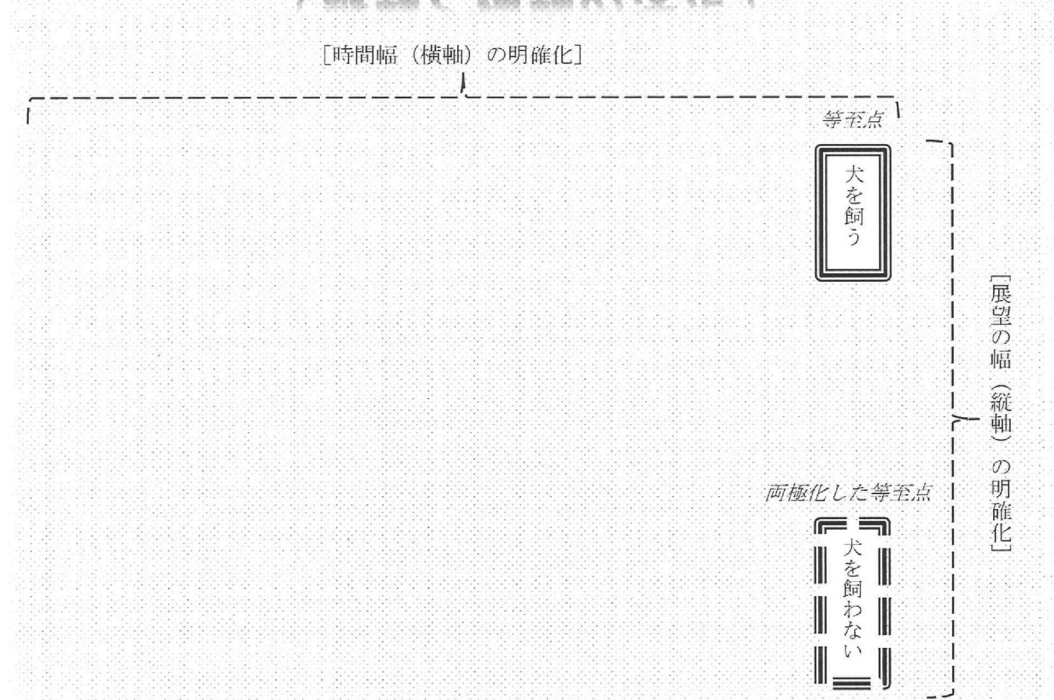
➤ 文字に起こし、繰り返し精読しよう

『忠犬ハチ公』の話を聞いて人と犬がともにあることに感動し、友達の家遊びに行った時に、友達が犬を飼っているのを羨ましく思ったことがきっかけで、犬が欲しくなった。ペットとの暮らしがブームでもあった。きょうだいに打ち明ければ、やっぱり欲しいと言ったので、思い切って親にねだったのだが、マンションでは犬を飼ってはいけなからと、ダメと言われた。それに誰が世話するの？と。何度もねだったが、ダメだった。でも、一戸建ての二世帯住宅に引っ越しをすることになり大きな買い物でお金がないと親は言ったがおじいちゃんとおばあちゃんが口添えと実質的な助力をしてくれて、犬を飼うことになった。

スライド 1-10

(資料1 つづき)

➤ 等至点と両極化した等至点を設定しよう (縦軸と横軸の決定)



スライド 1-11

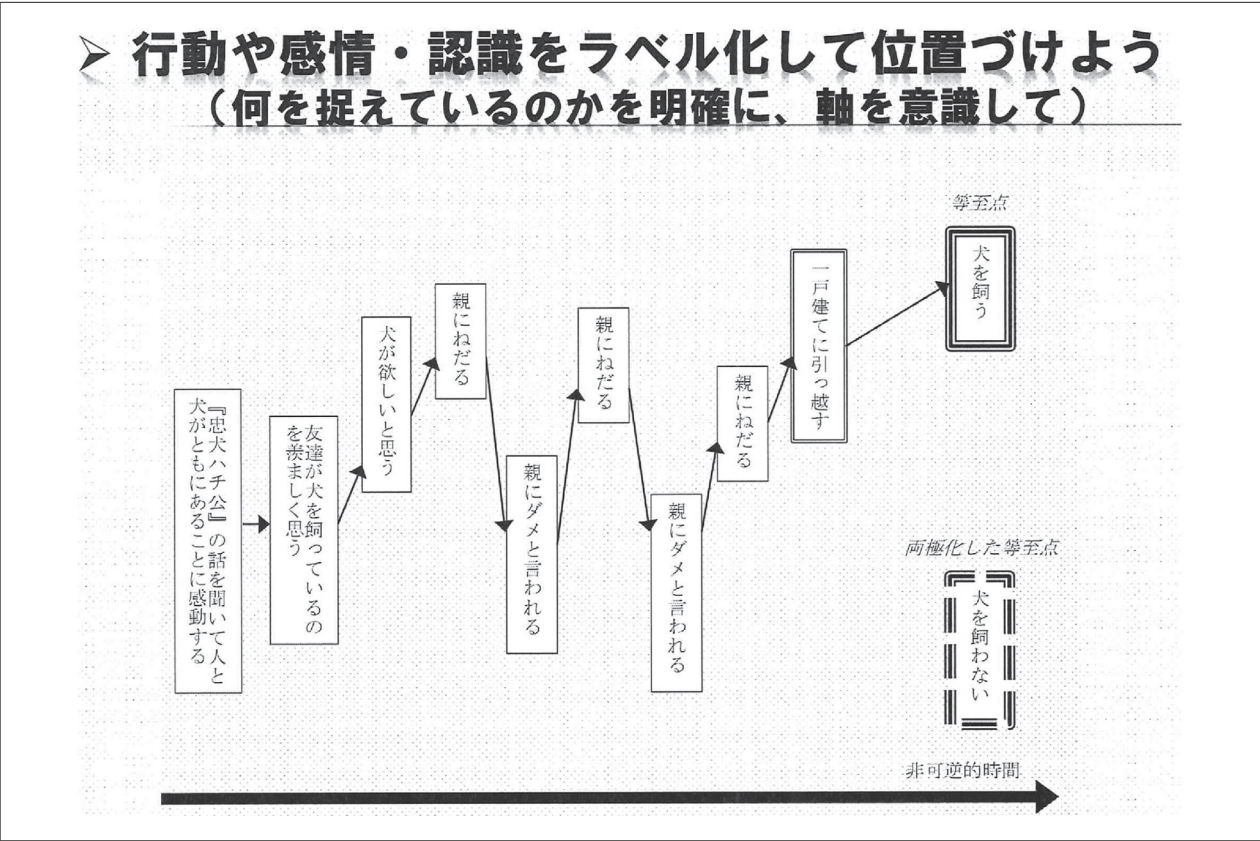
➤ 意味のまとまりごとに区分しよう

『忠犬ハチ公』の話を聞いて人と犬がともにあることに感動し、／友達の家遊びに行った時に、友達が犬を飼っているのを羨ましく思ったことがきっかけで、／犬が欲しくなった。／ペットとの暮らしがブームでもあった。／きょうだいに打ち明ければ、やっぱり欲しいと言ったので、／思い切って親にねだったのだが、／マンションでは犬を飼ってはいけないからと、／ダメと言われた。／それに誰が世話するの？と。／何度もねだったが、／ダメだった。／でも、一戸建ての二世帯住宅に引っ越しをすることになり／大きな買い物でお金がないと親は言ったが／おじいちゃんとおばあちゃんが口添えと実質的な助力をしてくれて、／犬を飼うことになった。

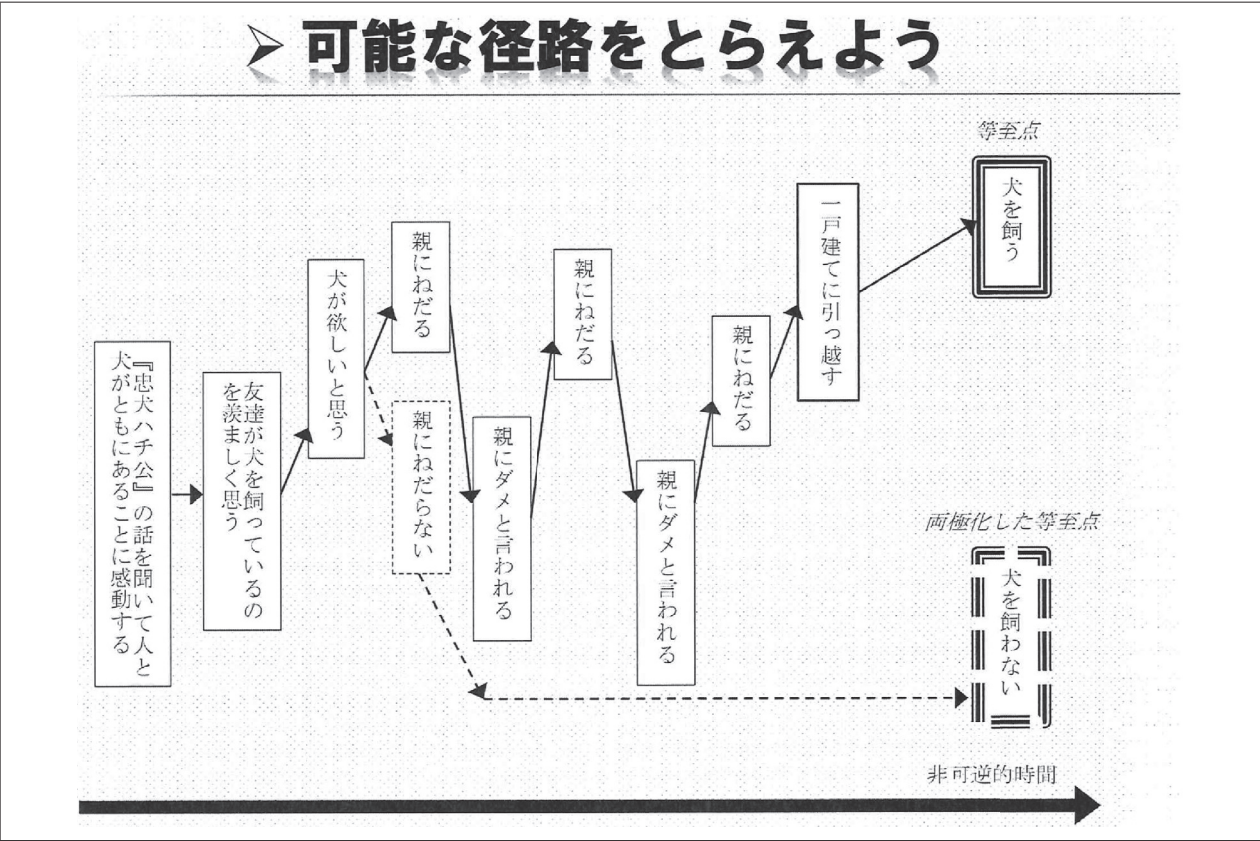
(問い) 下線は???

スライド 1-12

(資料1 つづき)



スライド 1-13



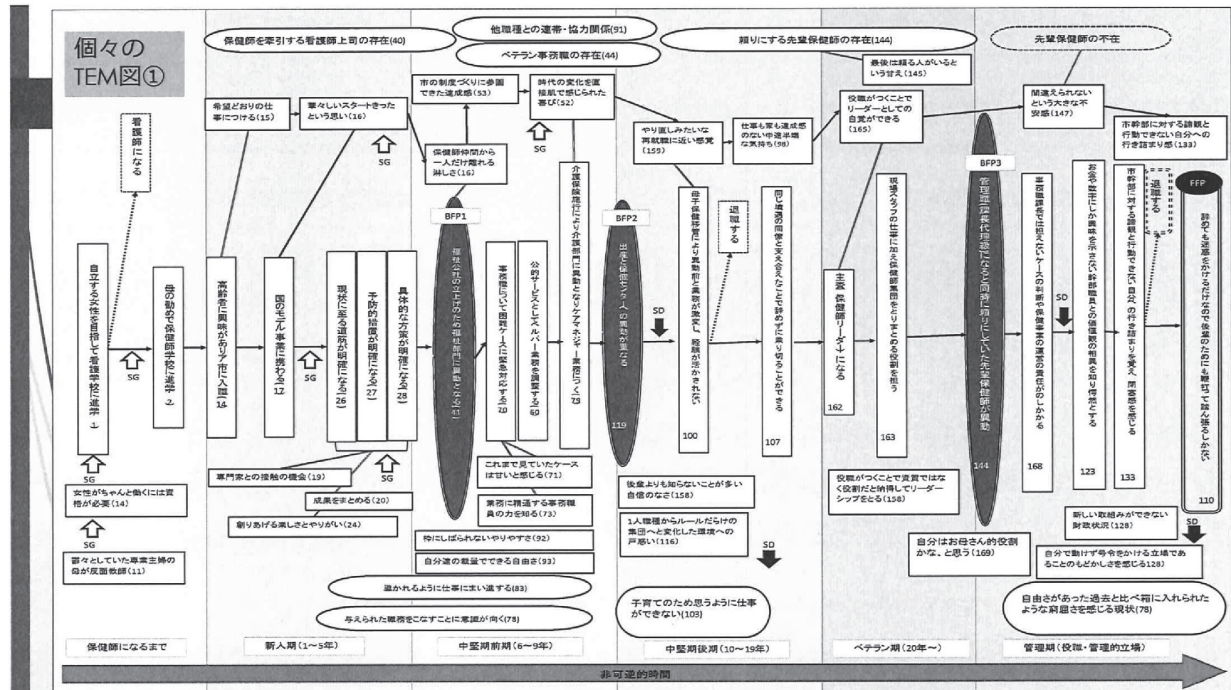
スライド 1-14

TEMの概念ツールと本研究での適用

安田裕子・サトウタツヤ：TEMでわかる人生の径路；質的研究の新展開，誠信書房，2012の解説をもとに作成

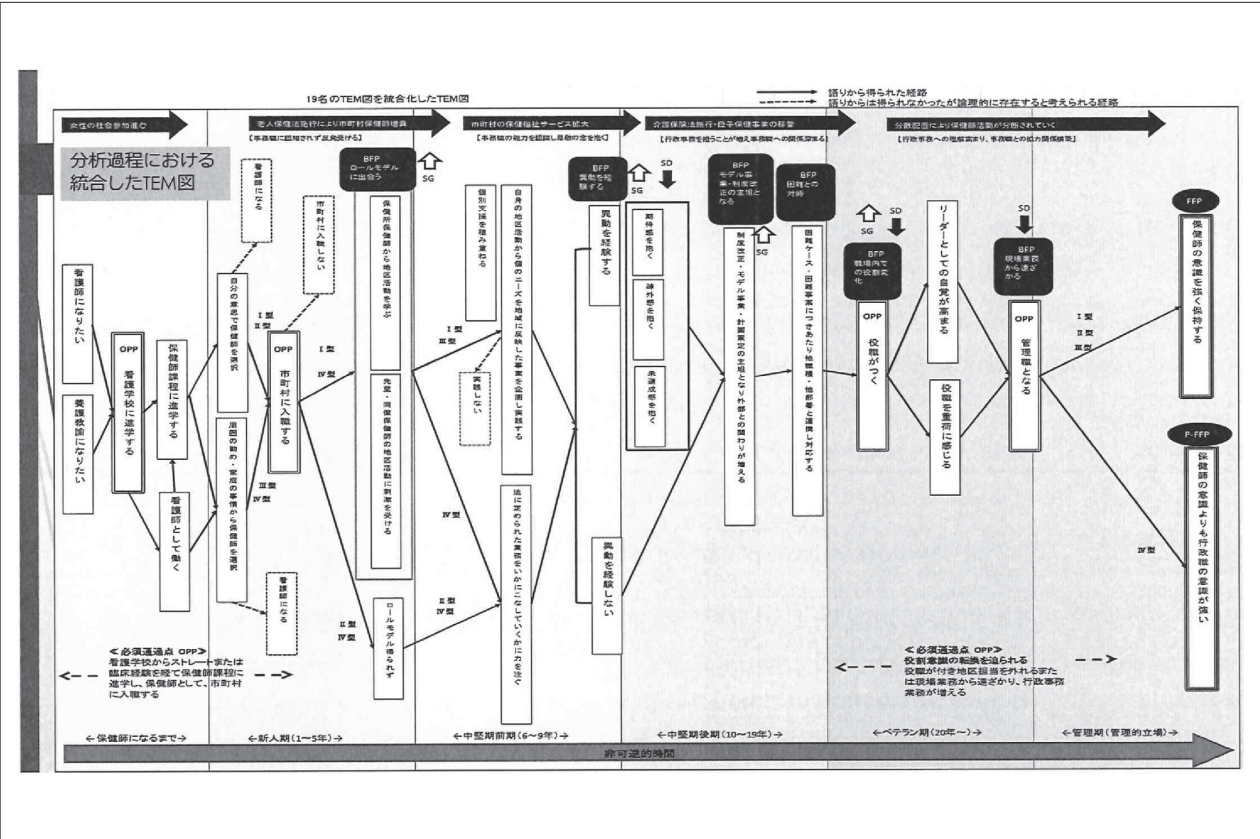
7	概念ツール	本研究での適用
	等至点 (Equifinality Point : EFP)	研究目的である職業的IDの形成に基づき，多様な径路が職業的IDの形成という形で収束すると考え「職業的IDを形成している状態」とした。
	両極化した等至点 (Polarized EFP:P-EFP)	等至点とは対極の意味を持つ状態として「職業的IDが揺らいでいる状態」とした。
	分岐点 (Bifurcation Point: BFP)	等至点との関連を捉えるため，職業的IDの形成に関連すると考えられた経験（自信向上やキャリア形成のきっかけとなった経験，等）が分岐する地点とした。
	必須通過点 (Obligatory Passage Point: OPP)	市町村保健師であれば，多くが経験せざるを得ない事象（人事異動や昇進等）とした。
	社会的方向づけ (Social Direction:SD)	職業的IDの揺らぎを生じさせる経験，認識，周囲の環境や時代背景等とした。
	社会的ガイド (Social Guidance : SG)	職業的IDの形成を促す経験，認識，周囲の環境や時代背景等とした。
	非可逆的時間	保健師になる前から現在までの時間とした。

スライド 2-1

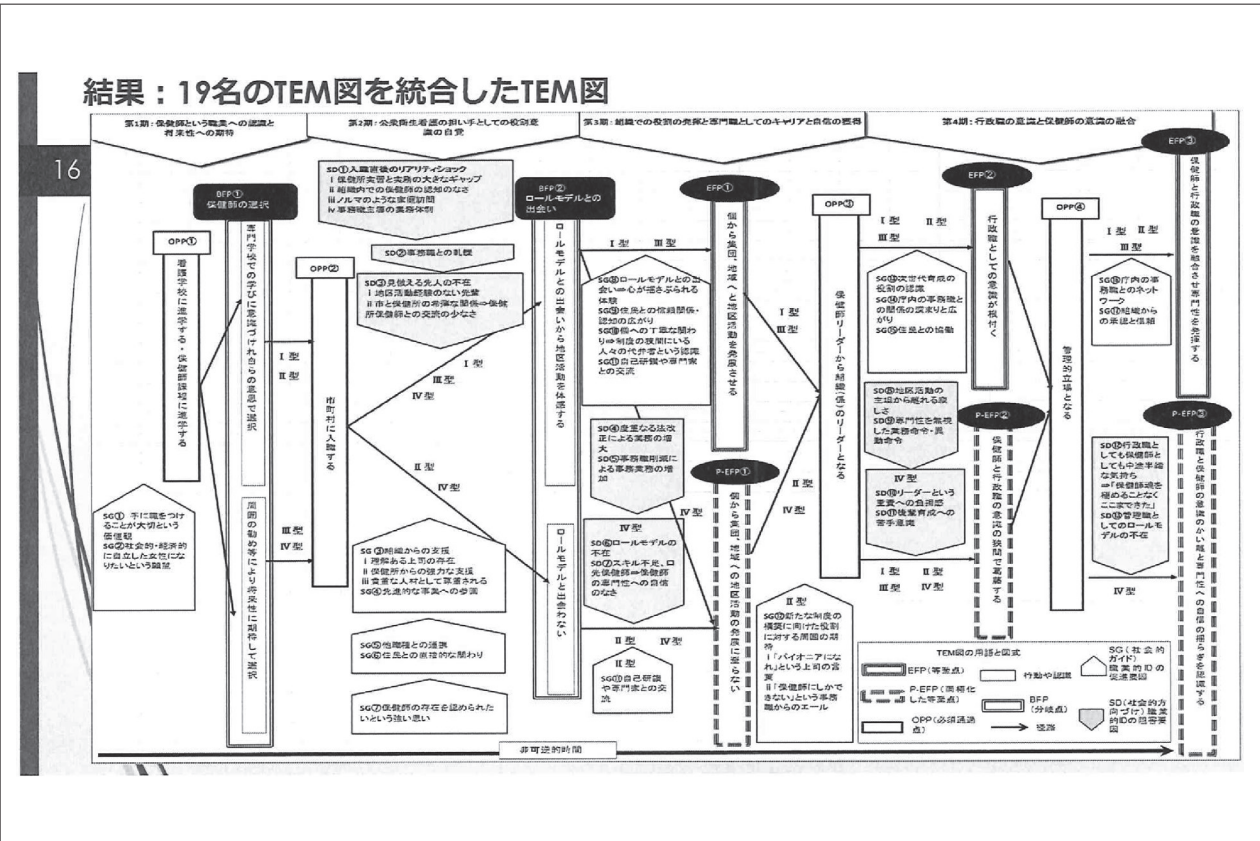


スライド 2-2

(資料2 つづき)



スライド 2-3



スライド 2-4

2) TEMによる経験のプロセスの径路の区分

区分	時期	アイデンティティの形成段階に基づく命名
第1期	看護学校進学～保健師の選択 (市町村入職まで)	保健師という職業への認識と将来性への期待
第2期	保健師の選択～ロールモデル との出会い(新人期)	公衆衛生看護の担い手としての役割意識の自覚
第3期	ロールモデルとの出会い～組 織のリーダーとなるまで (前期中堅期～後期中堅期)	組織での役割の発揮と専門職としてのキャリアと 自信の獲得
第4期	組織のリーダーとなる～保健 師と行政職の意識を融合させ 専門性を発揮するまで (ベテラン期)	行政職としての意識と保健師の意識の融合

スライド 2-5

3) 経験のプロセスにおける各地点の設定とその根拠

各地点	地点の出来事・経験・意識等	根拠
等至点(多様な経路がいつ たん収束する地点)	① 個から集団、地域へと地区活動を発展させる	専門職としてのキャリア 経験から、行政職と しての意識の根付き、 現在のアイデンティ ティの認識の段階へと 到達していた
	② 行政職員としての意識が根付く	
	③ 保健師と行政職の意識を融合させ専門性を発揮する	
分岐点(複数の経路が発 生・分岐するポイント)	① 保健師の選択動機	次の段階に至る転換点 として個々の歩みが分 岐したと捉えられた出 来事、経験から
	② ロールモデルとの出会い	
必須通過点(理論的、制度 的、慣習的にほとんどの人が必ず 通過する地点)	① 看護学校から保健師課程に進学	研究協力者全員が通過 していた経験、出来事 である
	② 市町村に入職する	
	③ 保健師リーダーから組織のリーダーとなる	
	④ 管理的立場となる	
社会的方向づけ(個人の行動や 選択に制約的な影響を及ぼす社会 的な諸力)	法改正による業務の増大、事務職の削減 等	職業的IDの揺らぎを生 じさせる作用が捉えら れた
社会的ガイド(社会的方向づけ とは逆の行動や選択を促進したり、 助けたりする力)	職場からの承認、住民への認知の広がり 等	職業的IDの発達を促す 作用が捉えられた

() 内の用語の意味は、安田ら(2012):TEMでわかる人生の経路,誠信書房,p209-242、安田ら(2015):TEA理論編,新曜社より引用

スライド 2-6